

竹尾民右衛門著『鮎井雜記』八（公文書センター所蔵）

きちゆう

己丑（文政12^へ八二九^年）五月上山クグノ村にてウハバミ溺死之事

久々野

できし

うし にじゆう

なり この

よほどふえそうろう

当丑五月廿四日夜大風雨也。此節、水余程増候て稻田橋のザイワリ江上辺

より

かか

いため この

あたりに

を橋板一枚流れ来り引つ懸りザイワリを痛候。是時上山クグノ村辺にて山

おささわぎ

おほ

しに

拔往還水たゝへにて大騒、此時大いなるウワバミ山なだれにて死、川へ流

もうすこと

つき

いきそうろうやから

ども

つく

れ来り候と申事に付、見物にも行候輩あれ共、嗅気強く寄り付事ならず

見ずして帰りしといふ。長さ八間にて胴の廻り八尺をからむとか仰山な

けん

しゃく

ぎようざん

る事と思ひしに、稲田町山口屋幸左エ門とて元生薬屋にて今は本類商売致す

ゆえ

ちかづくもの

この

まえかた

ほうこう

おり

故、我等写物をして近附物也。此幸左エ門前方江戸表へ奉公に出居候節、

たちばなちよう

のよし

立花町三丁目大坂屋平六とて江戸中の大生薬屋之由、此平六方に色々珍物有

どようぼし

いたし

いき

て夏土用干を致候節、手伝をやめ見に行しにウワバミの全骸を干し候を見候

に、長さ七間にして頭は算を二つ合せたる程にて鱗は四五寸廻り程、胴はい

み

うろこ

かさま三尺余からみ可申とも相見へ候物のよし。右位のが二つ三つも有之よ

もうすべし

これある

し相咄し候。さすれば大きなるも有之候と見へ候也。

あいはな

これあり

又坪井氏方申越候には四五年以前之事也しが御先手足軽岡田勇蔵と申者、

よりもつしこし

なり

おさきて

もうす

元来は会津藩の臣にして有しが、いかなる故か会津を出奔して此方様にて足

しゅつぽん

軽を勤居しに、右之者縁家はも会津藩の御医師にて有之候に、右之医師の方

これあり

より借り参りしとてウワバミの頭を持参。上々様へも入御覽候よし、数之助も

つとめおり

まい

ごらんいれ

見しに是は頭の骨ばかりなかに大サ差渡し鯨さし式尺程有之よし。右に

さしわた

に

肉付候はば大いなる事と申越候也。さすれば人の一人杯は呑む筈と評せし

にくつけりひ

もうすこし

ひと

の

はず

ひょう

事也。